

高校生いじめ防止協議会

1 日 時

令和5年11月4日（土） 午後2時30分から午後5時まで

2 場 所

東京都庁第二本庁舎1階 二庁ホール

3 出席者

高校生委員6名（1名欠席）

4 事務局参加者

浜教育庁、小寺指導部長、土屋指導部指導企画課長、信岡指導部高等学校教育指導課長、西牧指導部主任指導主事（産業教育担当）、福田指導部主任指導主事（生徒指導担当）、濱田統括指導主事（生活指導担当）、西山統括指導主事（生活指導担当）、佐竹統括指導主事（生活指導・産業教育担当）、宮崎指導主事（生活指導担当）、菅原指導主事（生活指導担当）

5 傍聴者

1名

6 報道機関

取材2社（日本教育新聞、教育行政研究会）

7 協議内容

- 3 東京都におけるいじめ防止等の対策について
 - (1) これまでの協議の概要
 - (2) アンケート結果の考察・協議
 - (3) 高校生いじめ防止協議会からの提案

8 審議記録

【高校生委員A（委員長）】

- ・高校生いじめ防止協議会の開会を宣言。
- ・高校生委員の出席状況を報告。
- ・本日の司会者を選出。司会に、高校生委員Bを推薦。御異議の有無を確認。

【浜教育長】

- ・「高校生いじめ防止協議会」の委員へのお礼
- ・「東京都子ども基本条例」を踏まえた本協議会設置の意義
- ・本日の協議会への期待

【委員自己紹介】

< (1) これまでの協議の概要 >

【c】私から、これまで行ってきた事前打合せでの協議の内容について、振り返りを行う。

○第1回の打合せは、8月21日（月曜日）に実施

- ・本協議会の趣旨等について事務局から説明
- ・いじめ問題に関する私たち高校生の考えを、率直に出すことを確認
- ・委員長、副委員長の決定
- ・いじめ問題に関して各委員の考えを共有

【委員から出た意見】

- ・それぞれの個性があるのに自分と合わない部分でぶつかって、いじめが起きる。
 - ・「そんなことだったの？」みたいなことがきっかけの場合もある。些細なことで対立したとき、いじめに発展する前にどう対処するかというのが必要。
 - ・そもそも、私たちの周りでは、いじめに対してどれくらい関心があるのだろうか。
- 「自分たちの考えだけでなく、みんなの考えを聞き、高校生いじめ防止協議会としての意見に反映させるために、アンケートを取る」ことを決定。

○第2回の打合せは、9月25日（月曜日）に実施

- ・アンケートの内容について、目的や対象、作成スケジュール等の確認・検討
- ・「相談しやすい相手や環境が、私たちの身の回りにあるのか」についての議論

【委員から出た意見】

- ・スクールカウンセラーの活動状況や相談状況はどうなっているか。
 - ・相談窓口について、身の回りでのどの程度利用しているのか。周知が十分か、相談したいときに相談できるのか。
- 私たちの身近ないじめ対応や相談等の状況を、アンケート結果から知った上で、「いじめ防止のために、自分たちに、学校に、社会に、何ができるのか・何をしていくのかを、高校生いじめ防止協議会として提案する」ということを決定。

○第3回の打合せは、10月25日（水曜日）に実施

- ・自分たちの学校で実施したアンケート結果について共有（10月25日時点の回答状況516件）

【委員から出た意見】

- ・いじめの捉え方の回答を見る中で、いじめに対する価値観が多様であることが分かった。
 - ・スクールカウンセラーに対する回答では、思ったより相談している人が多かった。相談に行くだけで悩んでいると周りから思われてしまうことが嫌だと感じる人もいるから、もっと気軽に話せるようになることや、生徒との距離が重要かもしれない。
 - ・生徒がいじめの対応に直接関わってこなかったから、「学校や教育委員会が行っていることが、よく分からない」と回答した人が多いのかもしれない。
- 「回答者の記述の内容を、時間をかけて読み込み、11月4日当日までに各自でアンケート結果から分かったことなど、自分たちの考えを整理しておく」ことを決定

- ・アンケートの回答は最終的に1000件以上になった。
- ・協力してくれた皆さんにこの場を借りて、感謝を申し上げる。

< (2) アンケート結果の考察・協議 > 【進行：高校生委員B】

【高校生委員C】

○相談相手について

- ・「嬉しかったこと、楽しかったことを誰に話しますか。」という質問と、「学校での嫌な出来事を誰に相談しますか。」というアンケートから、相談相手は、家族・友人が圧倒的に多いということを感じた。
- ・「学校生活や私生活の嫌な出来事は誰に相談しますか。」という質問から、嫌だったことになると誰にも話さない人が増加していることに気付いた。嬉しかったことや楽しかったことに比べて、話しぶらいとことであることを感じた。

○身の回りでの出来事について

- ・「学校で、友達や周りの生徒が、誰かに悪口を言われたり、叩かれたりして嫌な思いをしているところを見たことはありますか。」という質問から、暴力やいじめに当たる行為を見たことのある人が少ないということで、いじめの現場としては、裏で起きていることが多いのかなと思ったり、あと、そもそも気付かないということをもって、そこからいじめに関わる人というのが、本当に一部の人に関わっていて、それを気付かない人が多いのかなと思った。
- ・「そのときに、どんなことができましたか。」「その理由を教えてください。」について。「何もできなかった」と回答した人が圧倒的に多かった。その理由としては、異性だからとか、いじめられている人がいじめられキャラだったとか、自分に被害が生じることを恐れて、避けてしまうというのが多かった。

○スクールカウンセラーについて

- ・「スクールカウンセラーが学校にいることを知っていますか。」という認知度の質問と、「スクールカウンセラーに何回程度相談したことがありますか。」という質問から、スクールカウンセラーの認知度がすごく高いことが分かった。しかし、「相談したことがない」を選択している人が多く、利用者は少ないということが分かっている。
- ・「スクールカウンセラーにはどのようなことを相談したことがありますか。」これは、まず、母体数が圧倒的に少ないのだが、そこから考えてみると、利用者は勉強とか友人関係、自分自身のことが多くて、逆に、いじめ、今回の議題である「いじめ」に関しては、すごく少ないように思った。
- ・「スクールカウンセラーの先生たちは、気軽に話や相談ができますか。」という質問に対して。学校よっての五分五分というか、できる人とできない人が半々でいるということで、スクールカウンセラーの質というものが、学校によって差があるのではないかなというのを思った。
- ・「スクールカウンセラーに期待していること（してほしいこと）があったら書いてください（任意回答）」に対して。これは、スクールカウンセラーへの期待ということで、親身に話を聞いてほしいや、関わる機会をもっと作ってほしいということで、生徒がすごくスクールカウンセラーに期待しているということが分かった。

○相談窓口について

- ・「東京都には、SNSや電話等を活用した相談窓口があることを知っていますか。」と「東京都の相談窓口を利用したことはありますか。」の質問について。東京都にはSNSを活用した相談窓口があるということ、東京都の相談窓口を利用したことの質問に関して。スクールカウンセラー同様、認知度が高いことが分かった。しかし、利用している人の数が少ないことも分かった。

- ・「どのような内容で利用しましたか。」こちら母体数が少ないが、そこから考察すると、友達関係、それから新しく入っている「家族」というものがあつた。そして、あと「勉強」ということで、ここから推察するに、「家族」というのが入ってきたというのは、初めの質問に戻るのだが、「誰に相談することが多いですか。」という質問で、「家族」「友人」というのが多かったのだが、もしも「家族」という相談者が居なくなってしまうと、こういうところに身を寄せるといふのを感じて、そうすると、窓口といふのは、第三者の相談者となっていることが分かつた。
- ・「東京都の相談窓口を利用したいと思ひますか。」という質問に対して。「思ひない」「あまり思ひない」といふのが9割くらいあるのは確かである。「その理由を教えてください。」といふことから抜粋するに、「全く知らない人だから」とか「相談したら誰かにばれそう」みたいな、ちょっと危機感を抱いている人たちもいることが分かつた。

○いじめアンケートについて

- ・「学校でのいじめアンケートに毎回きちんと回答していますか。」という質問で、「毎回している」「だいたいしている」がほぼ全員といふのは明確。
- ・「なぜいじめアンケートを実施していると思ひますか。」については、「いじめをなくすため」「いじめに対応するため」といふことで、皆さん、意義をもって回答していることが分かつた。
- ・「いじめアンケートの効果があると思ひますか。」という質問について。「少し思ひ」「あまり思ひない」といふ人が多くて、確かに意義は分かっているのだけれども、効果があるといわれるとどっちなのだろうといふ人たちが多く思つた。
- ・「その理由を教えてください。」に関しては、「先生に伝わっていないと思ひ」とか「恐れて書けない」、その首謀者にばれるのではないかといふ恐れで書けない人もいる。逆に、ポジティブに考えると、いじめをする人を抑制することができるといふのもあり、また一方で、無いよりはましみたいな人がいた。

○いじめについて

- ・「どのようなことがいじめに当たると思ひますか。」の回答として、「二人以上で殴る、蹴る、無視をするなど」相手が嫌な想ひをした時点でいじめだと、相手の気持ちに注目する人もいるし、物理的に何かをしたといふことに注目する人もいて、人によってやはり基準が異なっているといふことがよく分かつた。
- ・「いじりはどのようなことですか。」の回答として、本人が嫌がりつつも楽しむような行為とか、相手もいじりだと分かっているといふことで、これも人によっては「いじめ」と混同するなど、第三者から見たら、すごく分かりにくいことだなといふことが分かつた。
- ・「けんかとはどのようなことですか。」の回答として、けんかの基準は、比較的、皆さん、暴力とか意見を対等に話してエスカレートしていくとか、皆さんここは分かっているらっしゃるのかなと思つた。
- ・「いじめについて知っていることを教えてください。」の回答として、一部だが、「いじめがあることで不登校になることが多い」といふことで、いじめに対して悪いイメージをもっている人が多かった。
- ・「いじめの現場を目撃したらどうしますか。」の回答として、自分でどうにかできる人もいればできない人もいるといふことで、誰かに助けを求める人もいることが分かつた。

○いじめ防止対策について

- ・「学校のいじめ防止対策は十分だと思ひますか。」という質問に対しては、3割ずつくらいが十分

だと感じているということが分かった。

- ・「東京都教育委員会のいじめ防止対策は十分だと思いますか。」に関しては、「分からない」人が3割から4割に増加していて、いじめ対策については、自分の学校よりも尚更分からないことがあるのではないかとということが実態と感じた。
- ・「いじめが起こった後の学校の動きは、迅速かつ適切だと思いますか。」という質問から、「分からない」人が多いというので、分かる人でも半数以上の人が適切だと思っていないことが分かった。「分からない」人が多いというのはそうなのだが、分かっている人でも半数以上は「適切ではない」と思っている人が多かった。
- ・「いじめが発生した後の東京都教育委員会の動きは、迅速かつ適切だと思いますか。」ということで、これも先程と同じように分からない人が多いのだが、分かっている中でも8割近い人は「適切ではない」と思っている、たぶん知らないのではないかなと感じた。

○これまでの踏まえて、考えた課題点。

- ①スクールカウンセラーの在り方
- ②東京都の相談窓口の在り方
- ③学校のいじめ対策をより知ってもらうためには

○課題点に対して考えたこと

①スクールカウンセラーの在り方

- ・小学校・中学校・高校に関わらず、積極的に生徒に接する必要がある。
- ・スクールカウンセラーの人数を増やして教師の業務をお手伝いしてもらうことで負担を削減してもらうというのと、スクールカウンセラーが増えて、積極的に生徒と接することで、いじめや一歩手前のいじりの場面を目撃したときに迅速に対応できる。
- ・小学校3年生までは、彙力がはっきりしていない年齢であるから、月に一度カウンセリングを実施するというので、アンケートではなく、カウンセリング一本ではどうか。高学年4年生から6年生に対しては、2か月に一度、カウンセリングとアンケートを実施するのが一番よいのではと考えている。
- ・中学校では、先程の小学校での生徒と積極的に接するというのと加えて、イベントへの参加、例えば、体育祭とかに積極的に参加して親近感を与えて話しやすい相手にあるのが大事だと思った。
- ・道徳の授業、今、道徳の授業というのは教師が担当していると思うが、ここを心理学というかそういうのにプロフェッショナルであるスクールカウンセラーの方がやった方がよいのではないか。
- ・中学校・高校は、生徒への積極的なアプローチに加えて、小学校の高学年と同じように、2か月に一度アンケートを行うとともに、カウンセリングも、3か月に一回くらいがよいと考える。

②東京都の相談窓口の在り方

- ・相談者のプロフィールを紹介したりだとか、実名じゃなくて違う言い方で、学校で公表したり、学校に大きなポスターを作成して、こういう人がやっていますみたいなものをもっと大々的に報告してはどうか。
- ・いじめ以外でも相談できる環境があることを周知した方がよい。都のいじめ窓口を見てみたが、小さく「いじめ以外でも大丈夫ですよ」という記載があり、もう少し大々的にポスターを作成した方がよい。

③学校のいじめ対策をより知ってもらうためには

- ・各都立高校にポスターを掲示することは、すごく効果的である。
- ・都の広告紙みたいなものに記載するのも、とてもいい案だと思う。

【高校生委員A（委員長）】

- ・後半のアンケートにて、「いじめがどのようなものであるか」とか、「いじりがどのようなものであるか」とか、「けんかは何」、そういうことについては、内容自体に個人差があまり大きく出ていない。「いじめとは」という質問に対しては、全員共通して嫌だと感じるのだとか、集団とか、あと精神的な面とか物理的な面、どっちもいじめに入るといふ記述が多く見受けられて、生徒一人一人の認識自体は問題ないと思った。
- ・これに対して、逆に、何でいじめが起きたにも関わらず何もできなかったのかとか、スクールカウンセラーの仕組みも知らないのかということになったときに、やっぱり道德の授業とかで、いじめ、こんなことがあったらこうやって解決しましょうとか、生徒間とか身近な解決方法は教わるが、行政とか学校を通じた解決方法というのを道德で教わっていないのを感じた。
- ・相談窓口については認知度の低さというのが出てきたが、実際に相談した場合にどのような結果が出てくるのかというのが、具体的に分かっていない。もちろん相談の仕方を知っている方は多かったが、相談した後どうなるのかという将来的な、その後の方向性っていうのは具体的に伝わっていなかったと思う。
- ・窓口を使うとどうなるのか、将来的なところを周知させる必要があると思う。行政を利用した解決方法というのをさらに周知していくべきだと考えた。
- ・いじめ防止カードなど連絡先を配付しているが、具体的に今後どうなっていくのか、相談した場合どうなるのかというのを表示していくことは可能か。例えば、実際の解決事例を入れるということも自分に当てはめやすいということで、分かりやすくなると考えている。
- ・授業に関しても、例えば、窓口の疑似体験を行うなど、行政側と生徒側の両方の視点をもたせるということは大切だと考える。
- ・学校で行うアンケートに対しては、かなり好意的な印象をもっている人が多かった。理由は、かなり身近であるという点で、直接自分がアンケートに記述することで結果につながりやすいという点が出ているのだと思う。
- ・アンケートについては、回答する生徒に考えさせる内容が必要である。私たちが協議会として実施したアンケートについても、実際にいじめが起きているかをアンケートするのではなくて、いじめとは何かを考えさせる内容だった。そのような問いが必要だと強く感じるため、学校のアンケートには、いじめそのものについて考えられる問いを付け足していくことが大切だと考える。
- ・「いじめを見たら何かしら行動する」と言っている方が9割以上超えており、「行動すべき」と考えていることは問題ない。しかし、実際にいじめが起きてしまい、行動できた人は4割。自分の中では「行動してやるぞ」と思いをもっている、実際にその場面にあうと行動がしにくいという状況になっている。その理由として、やはり「怖い」や、いじめへの判別がつかないという問題がある。
- ・スクールカウンセラーに関して、親近感等を上げるためには、まずは利便性の向上が大切だと思った。スマホやタブレットを使って予約したり、相談したりできるシステム、例えば、高校ではteamsなどを活用しているから、teamsを活用して予約できたらよいと考える。
- ・自分が小学校だった頃、授業中にスクールカウンセラーの方が来て、いろいろ声を掛けていただ

くが、そのとき、正直なところ面倒くさいなと感じたときがあった。何というか、急に知らない人から話しかけられても、距離があり「あ、はい」のような受け答えになる。

- ・スクールカウンセラーの副担任化、クラスに一人スクールカウンセラーという話も出たが、そもそも、こつこつと子供との距離を縮めていくこと大切だと思う。

【高校生委員F】

○アンケートの結果から考えたこと。

- ・相談について。嬉しかったことや楽しかったことに対して、嫌な出来事になると、誰にも話さないという回答の方が多く見られていた。特にスクールカウンセラーの利用率と先生の相談率が低いことを見て、その結果から、学校内で嫌なことを相談できる大人が少ないと思う生徒が多くいると感じた。
- ・「いじめを見かけたらどうするか」という問いに対して、先生へ相談すると回答としている生徒が多かったが、嫌な出来事とか楽しかった話はあまり先生には話さないという生徒が多い。いじめがあったことは先生へ一対一で報告するのが不思議だと思う。大人に頼らないと解決できないと子供なりに思うのは大きな理由としてあると思うが、回答した人の中に「何の解決にもつながらないかもしれないけど」と、期待できてないけどとりあえず報告するみたいに行っている生徒がいた。
- ・いじめを見て何もできなかった理由として、ただのノリなのかいじめなのか分からなかったと答えた生徒が多かったが、いじめを見て見ぬふりをしてはいけなくとも、その状況で本人が嫌がっているかどうか第三者からは判断が難しい。だから、本人の意思表示が最も早く明確にいじめの有無につながると感じている。

【高校生委員E】

○アンケートの結果から、「いじめが起きた後のことについて」

- ・前提として、「いじめを見たことがあるか」という質問に対して、約9割が見たことがないと答えている。それなのに、なぜ、いじめ問題が年々増加しているかということに対して、いじめのやり方が本当に汚くて、例えば、SNSとかで誹謗中傷をして叩いたり、学校生活で目につかないところでやったりするというやり方をしているというのが、私の考察である。
- ・先生や周りの人に気付かれないからこそ、いじめられている本人は、本当に、毎日苦しい思いをしている。その部分を改善するために、話そうと思える信頼関係を先生と築かなければいけないということや、最近のことを聞く機会を設けなければいけないと考えた。
- ・小・中学校では現実的かもしれないが、高校になると、なかなか先生と対面して話すという時間がない。少し難しいかもしれないが、先生との信頼関係というのは、学校生活において本当に必要なことである。
- ・学校で一番身近な大人と言え、自分の担任の先生や副担任など。いじめが起きたときには、頼らなければいけない大人というのは、自分のお父さん・お母さんだけでなく、先生方という大人も含んでいると思う。
- ・「いじめアンケートは効果があると思いますか」という質問に対して、「思う」と回答する数が思ったよりも少なく、「少し思う」や「あまり思わない」という回答数が多い。このことから、いじめが起こっていると気付くための方法、例えば、いじめアンケートやカウンセリングの実施に対して、実施の方法の改善が必要なのではないかと考えた。

【高校生委員D】

○教員について

- ・学校の教員が、学校の中の大人で距離が一番近いと思うのだが、それでも相談する相手としては、信用されていない。先生からの上からの目線のアドバイス、良いときもあれば悪いときもあって、その上からの目線で先生との距離を感じたり、相談しづらいついてという意見があったりした。
- ・時代に応じていじめのやり方や人が変化して、先生の中でも昔の考えをそのままもってきて、生徒と少しと意見が食い違うことがあったので、そういうところを少し改めることで、相談したくなる気持ちを高めることができると思う。

○価値観の違いについて。

- ・「いじり」と「いじめ」の定義の境目が一人一人違う。その結果、価値観の違いでいじめが起きたりする。
- ・仲の良い人とあまり仲良くない人の言葉遣いや、いじめの現場を見たときに、「あの人は仲良くないから助けなくていいや」みたいな考えをもつ人がいたり、自分より仲の良い人がいるからその人に任せてしまったりする人もいる。やはりいじめを見たときは仲の良し悪しで判断しない方がよい。

【高校生委員B】

○いじめアンケートについて

- ・私自身は、学校でのアンケートは、いじめが起きているのかどうかを把握するための質問内容だと考えていたが、アンケートの回答では、いじめを抑制するために行われているのではないかという意見があった。
- ・一方で、アンケートに関しては、「嘘を書くことができる」とか、「いじめられる標的が自分になってしまうのが怖い」とか、「先生に何か言われるのが嫌だ」ということから、本音を書けていない人も一定数いた。また、「いつも同じ質問になっていることから、作業になっている」という回答もあった。よって、アンケートは、根本的な解決につながっていない場合もあると考えた。

○相談窓口について

- ・意見の中には、「友達や家族に相談している人が多いため、わざわざ相談窓口を使う必要がない」という意見も多くあった。
- ・「相手が誰なのか分からない」とか「自分のことを知らない人だから」という理由で話したくないという意見もある一方で、「知らない方が安心、知っている人だと話しにくいから利用してみたい」という意見もあった。

○スクールカウンセラーについて

- ・スクールカウンセラーに話すことが、特別なことと意識している生徒が多い。
- ・「何か悩んでいたりとか、いじめに関わっているのではないかと予想されたりしてしまうことが怖く、予約しにくい、話しにくい」という意見と、「そもそもどういふふうに予約すればいいのか分からない」といった意見もあった。
- ・「スクールカウンセラーだから相談しているので、学校の先生に伝えてほしくない」という意見や、「スクールカウンセラーとの対話が、真面目な面談みたいになってしまうのが嫌で、友達と話すような感覚で、フレンドリーに話を聞いてほしい」という意見も多く見られた。

○全体を通して

- ・「行政や学校といった組織を相手にすると、友達や家族以上にしっかりと内容のある話をしなけ

ればいけないのではないか」と考えている人が多く、そんなに大した内容ではないから、「相談しにくい、相談する必要がないのではないか」と考えている人がいることも分かった。

- ・「友達や家族などいつも話している相手の方が相談しやすい」という人と、「全く知らない人に匿名で話す方が話しやすい」という人がいたので、どちらにも対応できるような基盤を作っていく必要があるのではないかと思っている。
- ・学校の先生は、身近な存在なのに相談する人が少ないということが分かった。

それぞれの意見の発表が終了いたしました。何か質問や疑問、意見など委員同士での話をしたい方、質問したい方、また、付け足しや訂正などがありましたら、ぜひ、挙手をお願いします。

【高校生委員F】

○補足説明

- ・「どのようなことがいじめに当たるか」の質問のところで、回答として「被害者が嫌だと感じたら」という生徒や、「犯罪まがいの行為をしたら」と回答している生徒もいて、何をいじめだと思うか、本当に様々だなと思った。
- ・このギャップを気にして、自分が嫌だなと思ったことが、他の人にとっては大したことではないのではないかと考え、ギャップを気にして相談したくても相談ができない生徒がいたり、いじめかどうか分からなかったから何もできなかったという生徒が出てきたりすると思った。
- ・「いじめについて知っていること」で、「人が亡くなってしまう場合もあること、よくないこと」と答えている生徒が多かった。いじめが軽視できない深い問題だと認知している生徒が多いのに、相談がしづらいついているので、いじめが良くも悪くも学校内で身近な問題ではないのかもしれないと思った。
- ・「いじめを見たことがない」という生徒がいることもいいことなのかもしれないが、その分、もしかしたら目に見えないところで行われているかもしれないし、学校内でも先生と生徒では、いじめに対する感覚が薄くなってしまっていると感じた。

【高校生委員B】

○補足説明

- ・これまでの内容を聞いて思ったことなのだが、今回のアンケート結果に関しては、やはり、必須ではなかったこと、また、質問している学校が限られていることから、アンケートの内容を見て答えようと思ってくれた人だけの回答となってしまっていることが欠点だと思う。それは、例えば、自分がいじめをしていたときに、この内容のアンケートが送られてきて、答えなくてもいい状況でわざわざ答える人はいないと思う。そのようなときに、いじめに興味のある人、いじめについて考えることのできる人は、今回答えてくださった人の中でもそういう割合が多いと考えると、この「いじめを見たことがない」とか「いじめ対策」とか「相談相手」という点において、このような結果になっているということを感じた。
- ・今回、答えてくれなかった人たちが、どれくらいいじめを見たことがあるのかとか、相談できるのかとか、回答できない理由など、そういったところを今後、もし、機会があったら調べることで新しい発見ができるのではないかと感じた。

【高校生委員A（委員長）】

○アンケートの回答対象の件について

- ・任意だからこそ、日頃、いじめとかにあまり関わっていない方もアンケートに取り組んで答えていただいた。アンケートとして十分意味があったと感じている。
- ・先生のいじめに対する意識についても話に挙がったが、第3回の打合せが終わった後に、自分の高校に、この資料（いじめ総合対策【第2次・一部改定】）を持って行って、いろいろな先生に聞いてみた。副校長先生に話を聞くと、「全員に配っている」と、「配っているのは令和3年まで。それ以降は電子化している」という話を伺った。その後、各担任の先生方とかいろいろな先生方に聞いてみると、「電子化されているのは知らなかった」という声が多くあった。また、この冊子を配られているであろう先生も、頻りに冊子を活用されていないような反応が多くありました。ただ、比較的、担任の先生に関しては、これを認知されている方も多くて、もし、いじめにあった場合は、これを詳細が書かれている本として、自分で対処できることは対処した上で、分からない・不安になったときは活用するという形で意識している人も多かったと思う。
- ・このような点に関して、先生方への周知とか研修とかもなされているのかなとは思っているが、もう少し必要かもしれないというのが個人的な印象としてあった。

（休憩）

<（3）高校生いじめ防止協議会からの提案>【進行：高校生委員B】

自分たちに何ができるか

【高校生委員B】

- ・いじめとを感じる場面や嫌だなと感じるレベルは人それぞれだということを生徒は忘れてはいけない。それを再認識できる場が常にあるといい。
- ・いじめを止めることはとても難しい。相談する相手が限られてしまったり、相談した後に自分に何か害があるのではないかと考えてしまったりする生徒が多いことも分かった。
- ・まずは抑制していく、発生しにくい空気を作っていくことが私たちにできる一番実現可能で必要な要素だと思う。
- ・いじめの行為につながるようなことですら、行うこと自体が幼い行為であるとか、周りにいじめの仲間になってもらうということがしにくい状況や環境を作っていくことで、いじめが発生しにくく、また、広がりにくい環境になると感じた。

【高校生委員F】

- ・いじめについてアンケートから読み取ってみると、人が嫌がることはそれぞれ違うということが分かった。
- ・いじめだと思っても、いじめではないと思っても、まず、第一として、「人が嫌がることはまずしてはいけない」という認識をもち直す必要がある。
- ・いじめかどうか分からないから行動に移せなかったということがあると思うが、いじめかどうかは問題ではない。人が嫌そうにしていると思ったら、それを止めるという認識でいけばいい。

【高校生委員C】

- ・自分の周りに被害者や加害者を作らないことが1番。
- ・その人が嫌がっていたら止めることや相談にのることがまず自分からできることなのではないか。

- ・環境の整備については、具体的な改革が必要。

【高校生委員E】

- ・周りの人に我慢しない、させないことが必要だと思う。
- ・そのためには、常に周りを見て、少しの人の変化にも気付かないといけない。自分のことだけでなく、周りのことも気にして生活しないと自分の知らないところで苦しむ人が出てしまう。誰かが困っていたり、休みがちになっていたりする子がいたら、「どうしたの？何かあったの？」と声掛けをして、「なんか困ったことがあったら無理しないで。我慢しないでね。」のような、優しい言葉を掛けたい。
- ・困ったことがあったら、その子から話すことを促せる関係を築いていく必要がある。

【高校生委員D】

- ・今回、改めて怖いと思ったのが、身内とかがよくやるノリ。仲良い人達がやるノリではなく、そのノリを知らない人とやると、例えばそれがやられた側にはいじめになる。
- ・ノリで乗り越えたら逆にダメなことがある。

【高校生委員A（委員長）】

- ・生徒に、行政とか学校のシステムに興味をもたせることが大切。
- ・学校内の生徒会活動、ニュースやテレビなどを通して、行政とか学校のシステムに興味をもっていじめに対して支援をし続け、議論を重ねるという意識が大切だと思う。
- ・道徳の授業とかで議論させる授業とかあるから、そういうところをさらに発展させていければ、意識が高まっていくと考える。

学校に何ができるか

【高校生委員F】

- ・私たちのこういう機会、協議会を行うなどの機会を、学校内でたくさん行えたら、声掛けができる生徒もどんどん増えていく。
- ・他にも、スクールカウンセラーのいる日を、プリントのみではなくてホームルームで伝えられたら「今週はこの日にいるのか。行ってみよう」と思うのではないかな。
- ・今回、私たちが作ったアンケートについても、クラスによって実施の機会が異なっていた。プリントを配布して先生から、「じゃあ掲示しておくからやっというて。」というクラスもあった。私のクラスの先生は「高校生委員のみんなが作ってくれたから、この時間何分とるからやろう」と言ってくれた。答える時間がどれだけ用意されているかは、重要なことだと考える。いじめアンケートでは難しいかもしれないが、1時間くらいとっても、私はよいと思う。
- ・進路指導とかで先生と話す機会が何回か用意されているが、進路指導以外にも個人面談の機会に、先生と距離感を近づけてプライベートの話もしやすい人間関係を築くのが大事だと考える。
- ・学校内のいじめの有無に関わらず、いじめ自体を学校全体でもっと重要視していき、身近に考えられるものにしていく必要がある。

【高校生委員D】

- ・時代に合わせて、いじめのやり方や人の心が変化している。年齢が近い先生だと気軽に話せるが、少し年の離れた先生だと、相談しづらかったり、少し上からの意見が来て納得いかない場合もあるという声がある。
- ・今の時代は、どのようないじめがあるのかとか、今の若い人たちはどうした方が、どう意見を出した方が親近感や話しやすさも得られるのかということを考える必要があるのかもしれない。

【高校生委員E】

- ・先生との距離を縮めることは大切だと思う。最低限の大人に対しての敬意とか、礼儀は必要だが、離れた友達みたいな感覚があれば話しやすい。現に私の担任の先生はフレンドリーな先生で、愚痴感覚で自分の思っていることとか悩みを打ち明けたら、すごく暖かい言葉とか激励の言葉をいただいて、背中を強く押ししてもらえた。もしその担任の先生との距離がなかったら、打ち明けられなかった。
- ・自分たちも先生と接しようっていう意識が必要だし、先生方たちにも生徒とのコミュニケーションを大切にしようっていう意識をもってほしいと思う。
- ・小・中学生でも、今はスマートフォンとかタブレットの電子機器を当たり前持っている。SNSの使い方の指導も必要だと思う。改めてどのような使い方をしなければいけないとか、こういう使い方はしているが、これはしてはいけないことの判別を、きちんと大人の方が伝えなければいけない。

【高校生委員B】

- ・私が相談しにくいと感じるときは先生方が忙しそうにしているときである。例えば、テスト前に授業の質問に行った際、そこで授業の質問はできるが、その後自分の話をしようとしても、授業準備や他の委員会の活動など、あまり長い間いると迷惑かもしれないと感じることがあった。
- ・先生方は優しい。だから、忙しくても話を聞いてくれるが、少し申し訳ないという気持ちがある状況のまま話すということが結構あった。そこをどうにかしてほしいというわけではないが、そういう私の経験があった。
- ・いじめアンケートに関しては、「いじめアンケートに書いてないからいじめがないとは限らない」ということ。いじめアンケートに本音を書けない人がいるということ。アンケートに書いてないとかいじめの話を受けないから、自分のクラスは安心と考えるのは違う。
- ・いじめアンケートが作業化しているということについては、例えば、質問の仕方を時々変えてみるのが一つあると思う。「ある・ない・分からない」のような形だと単純過ぎて、「これからアンケートを行うのか」という印象をもち、あまり考えない状況になると思う。「いじめについて知っていることを教えてください。」や、「どういうことがいじめだと思いますか。」のような内容を年に1回、記述の部分を作ってみるなど、工夫をした方がよい。
- ・そもそも生徒に、いじめ問題に対する関心があるのかが疑問。いじめアンケートに本音を書ける人が少なく、本音を書けない人もいる。例えば、「書き終わった人から裏にして置いてください。後で先生が回収しに行きます。」という場合だと、周りが書き終わっている中、自分だけが書いていたら周りの目が気になり、とりあえず終わらせるために書いてしまうことがあると思う。本当は書きたいけど書けない、という人がいなくなるような環境を作っていけたらいい。
- ・スクールカウンセラーについて、まず、どのような人なのか分からないという状況をなくすことで、一定の距離はあるのだけど相手のことが分かっている、友達や家族に相談しにくいという人も、知らない人には相談したくないっていう人にも、どちらでも対応できるのではないかと感じた。しかし、スクールカウンセラーの職業上、人の悩みを聞くということで、あまり簡単に増やせる職種ではないと、その仕事に就いている人を増やすのが簡単ではないのではないかと感じた。
- ・一概にスクールカウンセラーを増やした方がいいと思うということだけを言うのではなく、スクールカウンセラーではないが、スクールカウンセラーみたいな役割を担っているような人、心理学に詳しい先生とか、そういった方を学校の教員の中で、一人決めたりとかして、スクールカウ

ンセラーという職以外の面でも相談できる相手を作っていけたらいいと感じた。

【高校生委員C】

- ・主に小・中学校に関しては、まずスクールカウンセラーに関して言いたいのが「フレンドリーに話す」というところで、いろいろな機会を設けることである。先程、あったように、一緒に授業を体験したり、行事等への積極的な参加も大事だと思う。
- ・アンケートに関しては、アンケート状況でいじめがなかったとしても、本当はないとは限らないというのがある。アンケートで見付けるのは、すごく難しいことである。フィルターというか、アンケートで逃れてしまった人を見付けるという仕組みも大事だと思う。

【高校生委員A（委員長）】

- ・スクールカウンセラーについて、実際に解決につながった例が上巻の42ページに記載されている。「スクールカウンセラー等との外部の相談員が発見」で高等学校が0件になっている。しかしながら、小・中学校では少しあるということで、高等学校になると距離感が如実に現れている。
- ・個人的には、行政とか学校がどのようないじめ対策をしているのかについて、議論する授業があったら面白いと思う。
- ・例えば、いじめ対策委員会が学校に設置されていて、こういう行動をしているが、どのような改善があるかとか、そういうのを考えさせる授業というの、ただ生徒目線からいじめについて考えるのではなくて、行政とか学校の行っているいじめについての取り組みを知ることにつながると考える。

社会全体で何ができるか

【高校生委員F】

- ・社会ができる取組として、相談窓口の電話番号はまとまったプリントで、よく学期末とかにいただくが、そのときに行っている内容を具体化して伝えられたらいいと思う。アンケートの結果から考えられたことで話したときも、何してもらえるのか分からない、その後どうなるのか分からないという声が多かった。そういう内容も相談番号と合わせて記載できたら、また、いじめ以外のことでも相談できるようにしたら、利用率も上がると思う。
- ・社会、行政と、少し異なるかもしれないが、教員がいじめについて考えられる機会を増やすことも大事だと思う。教員になってからでは遅い。教員免許を取得する過程において、大学の授業、もっといじめについて考えられる内容があった方がいい。

【高校生委員C】

- ・先程、いじめに関する知識を大学とかで教師になりたい人が学ぶのを義務付けるみたいな話があった。そのような制度は実際に義務付けられているのか。
- ・教員になった後でも、例えば、SNSとかに関する講習みたいなのはあるのか。

【福田主任指導主事】

- ・大学でも教職課程でいじめ等のことを学ぶ機会があるのかということだが、具体的な内容は大学によって異なる。生活指導といった全体的なことはどの大学でも行う。また、我々も大学の方から依頼をいただいて講義を行う機会もある。
- ・教員になった後も、私たち教員には研修を受ける義務がある。常にアップデートをしていく、勉強していく姿勢が教員には求められている。特に、1年目の先生は、初任者研修の内容にいじめをはじめとした生活指導の内容が入っている。自分で選んでいく研修でも、我々が講師として講

義を行う場合もある。

- ・学校の中でも研修をしている。例えば、夕方の会議等で「いじめ総合対策の〇〇ページを開いてください」と言ってミニ研修を開くとか、各学校で工夫しながら進めている。現代的なところで、先程SNSと挙がったが、必要に応じて取り入れている。

【高校生委員E】

- ・行政の相談窓口のやり方で、こういう手順で解決に導くという内容が必要だと考える。スクールカウンセラーから行政の相談窓口になると、相談の規模が大きすぎて、その規模が大きくなればなるほど相談がしづらくなるというのは、アンケート結果にもあるため、使いにくいという考えを無くさなければいけない。
- ・アンケート結果にもあったように、行政の相談窓口を使いたいという人があまり少なく、良いものだという認識もそんなにはないのではないかと考えた。相談窓口の相談解決数などの実績のようなもので、説得力のあるものを提示すれば「相談しよう」とか「頼りたい」と思わせることができる。

【高校生委員D】

- ・行政が行っていることは、紙が配られて分かるが、いざ自分が相談するとき何をしてくれるのか分からない。
- ・たくさん内容が配られて、どこに相談すればよいのか分からないとか、何か所もあるから全部かけるのも大変だし、一つにかけてこれがダメだったら他にも一緒ではないかと考えてしまうこともあるため、可能な限り一つに絞ってほしい。複数あるのであれば、「この機関はこの問題に対する相談が強いから、こういう場合はここに相談してね」というアピールがほしい。

【高校生委員B】

- ・私からは、いじめ対策とその結果をもっと広く伝えるという面で行政というよりもっと広い意味での社会という観点で話をする。
- ・ニュースを見ているといじめが起きたとき、例えば、いじめが起きたというときに、「何が行われていたのですか」と言われたときに、その対策があったとしても、結果としていじめが起こってしまったというマイナスの面しか、世には出ていかないというイメージがある。でも、実際はきっとそれだけではなく、対策したことによって解決した例とかもあるはずであり、普段そういったニュースしか見ていない生徒からすれば、学校の対策とか行政の対策とかはうまくいっていないのではないかという印象をもちがちだと思う。
- ・実績ということにも近いが、プラスの面でも広めていけたら生徒も信頼できる相手が増えるし、世の中として、いじめ対策をちゃんと行っているということを伝えられたら良い。

【高校生委員A（委員長）】

- ・事例を示すことはかなり大切だと考えている。いただいた意見の中で相談窓口について、些細なことで相談してしまうのがダメなのではないかとか、たいしたことではないのに行政という規模の大きいものに対して質問していいのかという声も見受けられた。だから、事例を示すことは大切だと思う。
- ・重い事例から軽い事例まで、様々な事例を示していくことで、自分の本当に些細な事も相談していいという安心感を伝えられると思う。

【高校生委員C】

- ・質問だが、先程、事例を示すというのがあったが、例えば、いじめを受けている人で、被害をなかなか口に出れず自分の中で背負い込んでしまいやっとな話することができたという人は、人に知られるのが怖いとかそういう思いをもっていると思う。公表するのが嫌だとかという人もいると思う。そういう人がいる場合、公表するのは難しく、事例を示すのは難しいと思うが、どう思うか。

【高校生委員A（委員長）】

- ・一部の事例についてプライバシーを隠した上で数個ぐらい事例を出していく。事例の中にも、人に明かしくいことでも相談して解決したという事例も含まれると、もちろん良いと思うが、実際の事例の状況にもよることだと思う。

【高校生委員B】

他に質問や意見、訂正等はあるか。それでは、これまでの協議の内容をまとめる。

自分たちができること

- ・自分たちを取り巻いている環境をよくしていくことが大切だという意見が多く出た。
- ・被害者・加害者を作らないために、今話し合っている私たちが積極的に広めたり、もしかしたらいじめではないかもしれないという認識だったとしても、相談できるような環境を私たちも・生徒自身も、作っていきなりするとよい。

学校ができること

- ・スクールカウンセラーの方と先生方についての意見が多く出た。
- ・私たちにとって親の次に身近な存在である先生方に相談しやすい環境を作ることで、いじめの発生を抑制したり、早期発見につながったりするのではないかと感じている。
- ・スクールカウンセラーについては、もっと身近な存在にしていくことで、自分の悩みや他の人がいじめられているのかどうかなど、少し深い話をしやすくなるのではないかと意見が多く出た。

社会全体でできること

- ・相談窓口について、規模が大きくて使いづらいという意見や、どうしてくれるのか分からないという意見が多かった。
- ・小さな質問をしたとしてもしっかり解決してくれるということを、もっと公表していくべきではないかという意見が多く出た。

最後に委員長に、提案をまとめていただく。

「全員で話して、全員でまとめていきたい」という委員長の提案があり、各委員が考えることを伝え、整理していくこととなった。(以下、その際に出てきた主な考え)

- ・しっかりとはっきりと自分の意見を明確に言えるなど、我慢しないことが大切。
- ・最終的に行き着く「環境づくり」というのは、全員が意見を言えて、それを受け入れられる環境ということ。
- ・なんでも話せる人を一人でも作っておく。
- ・先生やスクールカウンセラーなど、学校にいる大人との距離が大事。
- ・いじめについて、アンケートを形骸化させないことも含めて、先生方にもっと考えてほしい。
- ・取り組んでいることを、もっと大々的にアピールする。
- ・やはり、「まず嫌がることをしたらいけない」が大事ではないか。

【高校生委員B】

それでは、私たち「高校生いじめ防止協議会」として、3観点から提案する。

【高校生委員A（委員長）】

自分たちができること

嫌なことをしないという意識をもちつつ、互いが意見を伝え合える許容できる意識をもつ。例えば、なんでも相談できる人をもつなど。そのような意識をもつこと。

学校ができること

生徒と大人の距離を、信用を高めるなどして、距離を近付ける。スクールカウンセラーやいじめアンケート等のシステムを、さらに考えさせる・さらに興味をもたせるという方向に新しくかえていくこと。教職員に対する意識を変えることも大切であり、そのことが、いじめアンケート等の活動の活発化につながると考えた。

社会全体ができること

行政の方から生徒への、どのような授業をしているのかどのような対策をしているのかの強調やアピールすることが大切。生徒に分かりやすく示すためにも、情報をシンプルにして、実績や事例を示すことで、行政の意味や意義を示すことができるのではないかと思う。

この3点を提案する。

【高校生委員B】

・活発な協議、スムーズな進行への協力のお礼。

【高校生委員A（委員長）】

・高校生いじめ防止協議会の閉会を宣言。

【事務局（菅原指導主事）】

・高校生委員へのお礼

・本日の協議について

東京都いじめ問題対策委員会の委員の方々に映像を御覧いただき、皆さんからの提案を届ける。